

実証的かつ総合的・理論的に考究しようとするものである。

• 西洋文化コース

西洋というものを哲学的・思想的・文学的な面より多角的に考察して、西洋文化についての総合的知見を獲得するとともに、単なる博識以上の根強い思索力、適確な判断力を涵養し、学際的総合的観点から、西洋の本質及び現状を把握する。

• 人間関係コース

人間の生理的行動原理、人間の社会的行動原理、人間行動とパーソナリティー体系、人間行動と社会文化体系、人間行動と自然という主要な枠組を通じて、全体的な人間像に接近し、社会環境の中に生きる人と人との結びつきを究極的な課題とする。

• 計量科学コース

高度な数学理論の修得や数理言語学、行動科学、計量経済学、計量生物学などの境界領域の研究、さらに電子計算機についての高度の知識の修得などを通じて、自然科学はもとより、人文科学・社会科学においても広く用いられてきた数学的手法を学際的研究としてとらえる。

• 物質科学コース

物質の諸性質の微視的立場からの究明、もしくは物質の分子レベルでの変化のいずれかに重点をおき、物質の示す多様な振舞を、簡単な構成素材をもとに普遍的法則によって統一的に解明していく。

• 生命科学コース

生命科学は人間の生命尊重のためのものであるとする基盤のもとに生化学や分子生物学、生態学や進化学を中心にして、人間を含めたあらゆる生物の示す営みを共通の生命現象として追求し、理解しようとするものである。

◦ コース決定・変更

コース決定に関しては多少提出・発表時期が異なる



総科1号館

るのみで、他はコース変更も含め、**広大総科と全く等しい**と言ってよい。

次に学部長よりの返答であるが、一問一答形式でお答えいただいたので、そのままここに掲載する。

1. 大阪府大総科ができたいきさつ・背景と経過

昭和45年12月、当時の大阪府立大学教養部全教員の集会で、教育改革への決意が確認され、そのための委員会が発足した。この委員会は慎重な討議を重ねた結果、大学教育全体にわたる改革案を47年3月に答申した。この中に教養部を基礎科学的な新学部へ組織変更する必要性が示唆されていた。これが教養学部大多数教員の賛同を経て、同年7月の評議会に提示された。それで、全学的委員会である「教育体系委員会」が発足し、この委員会が全学の一般教育をも担当する学部新設を答申した。これに続き、さらに全学的な「新学部設立検討委員会」が発足し、この委員会では、基礎的学部の設置という意見を答申した。そこで大学として「新学部設置準備委員」を設け、52年12月の文部省による設置認可まで、具体的な諸準備を行なった。

2. 一般教育と専門教育の関係

一般教育と専門教育との関係においては、やはり大学設置基準に制約されて、その一体化という理念からは現実には後退しているが、一般教育における総合科目の他に専門教育に**総合ゼミナール**を設けて**各コース学生に自主的に選択履修することが可能な道**を拓いている。

3. 各コースの相互関係

各コース間としての必修科目をミニマムにおさえ、それぞれ他コースの開講科目をなるべく多く履修できるように配慮している。

4. 各コース定員数の問題

「コース選考委員会」で「しかるべく」指導して1つのコースへの過度の集中を避けるよう配慮している。保留をどのようにするかは、**望ましいとは考えられないことであるが、未決定の「課題」**である。

5. 共通必修科目（人間形成論・プログラミング通論）を作った理由、必要性

広い識見をもった学生の養成という目的で人間形成論とプログラミング通論を共通必修としている。

6. 広大総科をどのようにとらえているか。

広大「総科部」は歴史的には先発組であるから、いろいろと助言をうけるべき「先輩」と見ている。

7. 学生会の存在・活動について

これは学生の自然発生的な自主的組織で、新入生歓迎会その他の面でかなり活発に活動している。

8. 学部長から見た府大総科生

まじめでよく勉強している学生が多いと思う。ただし、もう少し気宇広大であってほしいと思うが

これは現代の学生一般に望む方が無理なのかも知れない。

9. 広大総科の今後の課題、問題点

大学院の創設。正確には「総合科学研究科」の増設が最大の課題で、これと並行的に第7番目のコースの増設（「計測」関係）も既定方針となっている。

10. 府大総科の設備・環境の充実度

学部段階では、現存施設で十分であるが、大学院や新コース増設には不足するため3号館が新たに約13億円の予算で建設されることになろうとしている。



総科2号館

以上を見ると発生、成長、組織内容にいたるまで広大と大阪府大両総合科学部は非常に似かよっているといえる。**一般教育重視からの発足、学際性、総合科目、共通必修科目**など。しかし決して広大総科のコピーにとどまらず独自の道を歩んで現在に至っている。府大総科の各コース定員にはいちおう上限が設けられているが、未だオーバーせず問題なくきている。そうした定員などの諸問題はやはり広大総科の経験が参考にされるべきであろうし、また発足3年目の府大総科の新鮮な空気に我々は謙虚に目を向ける必要があるのではないだろうか。ともにまだまだ流動性をもっている。筆者自身広大・府大両総科の設立課程を振り返って「総合科学」というものが高邁なる理想を想い、あらためてその渦中にある我々を認識した。

ほんの1、2時間程降っていたにわか雨もやみ、すがすがしくなった昼下がりには府大の全景を眺めるために近くの高層マンションの最上階へ上った。澄み切った空気の中、下方に総科を見て思った。「今は日本でたった2つの総科だけれど、これからはどんどん、新しい「総合科学」を目指した学部が創られるだろう。我々はその先駆けとして常に新しい模索を続けていくのだ。」と。

55年度生 安永省二郎

だいがくさい♡大学祭

～ あの日々よもう一度～

「大学祭の音が聞こえる」

11月といえば、大学祭。このところめっきり秋めてきた森戸道路には、様々なサークルの、趣向を凝らした立て看板がたち並んでいる。映画に演奏会、講演会に模擬店……。

もちろん、わが総科55生も大学祭には参加する。55生の研究室を利用して喫茶店を出すそうだ。名づけて「バラエティー喫茶」。これが果たして如何なるものであることやら、以下、責任者の井川君に述

べてもらうことにする。

…前期の試験が終わろうとしていた9月の末に、30日が大学祭のバザーの申し込みの締切日だと知って、あわてて実委に行ってみたが、バザーはもうだめであった。研究室だけは何とか使えそうであったが、10月になり、秋休みもすぐに終わり、何の計画も立たないままに後期に突入してしまった。問題は、この人目につかない場所に人を呼ぶにはどうするか？どのように変わった喫茶店にするか？ということであった。

なんとか「バラエティー喫茶」をすることに決まったが、それは時間帯によって、(テクノ・外国・見合い・御伽国)の各喫茶店をやるとうのである。これが成功するかどうかは、やってみなければわからないというのが、偽わらざる心境である。

もう1つの問題は、市中パレードのことだ。大学祭1週間前である現在、ほとんど決まっていない。何かやることにはなっているのだが。

大学に入って、もう半年立つのであるが、同じ学部でありながら、あまり話したことのない人が多数いるのは、寂しいことだ、と常々思ってきた。大学祭に多くの人が参加してくれることで、少しでも知り合いが増えれば、嬉しいことだ。

大学祭なんて、見るべきものじゃなく、やるべきものじゃないだろうか。

できるだけ多くの者が参加するように、呼びかけていきたい(と思っている。)

(井川篤宏談)

確かに最近、研究室へ集まってくる人間の数が増えた。これまでほとんど顔を出したこともないような人の顔をその中に見るのは大変嬉しいことだ、と思う。全員参加でないのは残念なことだが、各人の属しているサークルの活動を考えれば、致し方ないことかもしれない。

ともあれ、学生1人1人の協力によって作り上げられてゆく大学祭だ。成功を祈りたい。

55年度生 成田実香

僕の私の大学祭体験談 PART I

— 大学祭雑感 —

大学祭が終って、既に2週間が過ぎようとしている。最近やっと生活のペースも元に戻って来た。実際、大学祭の間は食事らしきものはパンの耳だけなどという異常な生活を送ったのだから、元に戻るにも多少時間がかかったのかもしれない。

今回の「バラエティー喫茶」の企画については、私は企画段階では、ほとんど協力ができなかった。しかし、「大学祭で何かをやる。」「総科55生のまとまりを強めよう。」という主旨(少なくとも私は、これが今回の大学祭参加の最大の目標であったと思う。)には賛成であったから喜んで参加した。

あくまでも主旨が上記のようなものであるため、価格を低くおさえたせいか、忙しかったわりに収益

は少なかったが、大学祭の直後は、何とかやり通せたことの充実感にひたっていた。しかし、振り返って見ると、「総科55生のまとまりを強めよう。」という目標はどこへ行ってしまったのだろうかという気がする。新しいメンバーも増えるには増えたけれど、全体から見ると、たいした進展も見られなかったように思われた。呼びかけが足りなかったこと、働いている最中に知らず知らずのうちに痺ができてしまったことなど理由はいろいろと考えられるが、ちょっと残念なことではあった。

それから、大学祭に直接に関係はないけれど、

「まとまる。」だとか「団結」などということについて総科55生の中でももう一度考えなおす必要があるのではないかと思う。研究室のたまり場の状況を見ても今のまとまり方が最良のものだとは思えない。むしろ、なれあいのまとまりならばなくなってしまった方がいいような気がする。大学祭の企画で、ねらった目標はもちろんそんなものではないと思っているけれど……。

55年度生 雲井 司

僕の私の大学祭体験談 PART II

— やったぞ!大学祭、手づくり喫茶 —

あれ程待ち遠しかった大学祭は、私にとって、しっかり見定める暇もなく、夢中のままで終わりました。総科55生の「バラエティー喫茶」、ひとまず成功したと言えるでしょう。

2週間前、もうすぐ大学祭だ、いくらなんでももう具体的に決めなきゃならない、と、あせって決めたのが「バラエティー喫茶」でした。私はその時、なかなかよいアイデアだとは思いましたが、それをいかにうまく、有効な形でやっていくかについては、あまりすごい期待を抱いてはいなかったものでした。ところが、「バラエティー喫茶」の1つに、私のふとした、本当にいい加減とも言えるような御伽の国喫茶という提案が採択された時、やるぞ!という気持ちと共に、頬の紅潮するような、何か、意識の奥からほとばしるような感情に包まれたものでした。非常に個人的な話になりますが、私は子どもの頃、童話を読むことが、なにか好きでした。今でも、ふと話の下りや、さし絵を思い出すと、胸の熱くなるような優しさや懐かしさを感じます。今だからこんな風に言葉飾ってはっきりと言えるのだけど、昔読んだ童話の数々は、私の育った自然環境や、私の回りにい

てくれた人々と同様に、私に生きる“人生”を与えてくれ、その豊かさを教えてくれた師であり、友であるのです。誰でも持つそんな思いをふっと感じて軽く微笑んでもらえたらよいな、と、考えることばかりは立派に、（実際はずい分ドタバタでしたが）夢中になって準備をし、当日に臨んだものでした。

今から思えばずい自分勝手な計画でした。衣装を作ったり、絵を描いたり、女装をしてもらったり、枯れ葉を拾ったり——私と共に、準備に、当日の仕事へと頑張ってくれた人々に、感謝の念をここに記さずにはいられません。

55年度生 中田和江



僕の私の大学祭体験談 PART Ⅲ

— 嬉し恥かし女装の体験 —

当初の予定では大学祭には参加しない筈だった私が態度を180度転換したのは、10月29日の事です。それまでは、皆が大学祭の準備に苦慮しているのを客観的にクールな視点で眺め、手伝いを求められても、30日からの四国行きを口実に大部分を断っていました。が、自分も参加するとなると、それまでがそれまでだけに、周囲に対して引け目を感じ、急に白々しい働きぶりをみせたり、皆様はきっとお信じ下さらないでしょうが、結構これで気を使っていたのです。

幸いすんなりと仕事に参加出来た安堵感と、私の代りに四国に行ってくれたY氏の穴を埋めようという使命感から、つい「何でもやる。」とか言ってしまう、アブ・ノーマルというか何というか、とにかく楽しい役割を与えられまして、はっきり言うと「女装」なのですが、それをものはずみで引き受けてしまっていて、落ち着いてから自分の軽率さを後悔しましたが、後の祭り。若さゆえの過ちは認め難いものでして、引っ込みもつかず、本番ではエラ

イ目に遭わせていただきました。

私は総科喫茶の他にSF研とワングル部の仕事もかかえていまして、1カ所にとどまっておれず、さりとしてこちらを立てればあちらが立たずの状態、ワングル部には訳を言って都合をつけてもらいましたが、総科に専念出来なくて申し訳無いです。特に総科の準備に疲れると気分転換にSF研に移動したり、その逆をやったりしまして、真剣にやってる人に失礼だったなあと思うのであります。

疲れがたまってくると体内のカルシウムが減少し、また、元来私は短気で神経質でしてイライラが高まり、「(女装を)やりたくない。」とか直前になって言い出したりして、準備に急がしいN女史の頭脳をさらに混乱に陥し入れたりもしました。私は私なりに準備の手伝いを頑張ったのですが、反面、トラブルメーカーとしても充分な活躍をした様です。

ところで、6月祭・大学祭を通じて、総科55生の活動メンバーがある程度定着したみたいです。何らかの行事をやるにあたって、中心となる人は必要ですから、それはそれで構わないのですが、「総科55生」として事を行う以上、総科55生全員参加が理想ですし、少しでもそれに近づく努力が必要でしょう。今回も出足が遅れた為、全員への呼びかけが不徹底で新しく参加した人が少なかったのが残念です。今後の課題だと思います。皆さんこれからも総科55生の輪を拓ける様、前向きに進みましょう。

ここだけの話ですが、総科55生は実はめじゃーなんですよ。ねえ、スコルピオン。

(ヒロ・ウォーター)

大学祭を終えて

— 自分自身が大学祭 —

以前にも何かに書いたのだが、「祭り」とは本来参加することにその最大の意味があり、自分が「祭り」の中心となり動くことで自分と「祭り」が一体化し、「祭り」を心から楽しめる様になる。と少くとも小生は確信している。その確信が今回の大学祭で一段と強まった。

私事で恐縮だが、小生は3日の朝から夜までほとんど1日、喫茶店の裏方、食物や飲物を作る役目で働いた。その時、大袈裟に言うなら「小生=大学祭」であった。つまり小生の肉体リズムと大学祭という祭の持つ(創り出す)リズムが完全にシンクロしたのだ。

これは何も小生1人の体験ではあるまい。模擬店で働いていた人、声をからして呼び込みをした人、映画会でフィルムをまわしていた人 etc 全ての「祭り」に参加した人々が体験したにちがいない。

それが「祭り」の魅力なのであり、ことによったらそれは魔力なのかもしれない。

55年度生 松浦 豊



大学祭……極致!/?

— うらかたさんごころうさん(自画自賛) —

さて何から書いていいものやら。Kは哲学的に書けと言う。大学祭のサ店を哲学的に語るなぞ至難の技だ。まあとにかくマス目をうめて退場しよう。

我55は研究室において「バラエティー喫茶」というなんともウロンな店を出したのだが、良心的価格と味のよさで意外に好評だった様だ。まああれだけ働いて不評だったら立つせがなく、くやし涙にかきくればならない。それはともかく忙しかったことは事実で忙しさの余り、注文はまちがえるは、あやしげな飲物は出すは、ガラスは割れるは、金はみだれ飛ぶは、人はぶったおれるは(もっともこれは後に、客に出す飲物を作る間に自分もしっかり飲んでた為と判明した)もうえらい騒ぎだった。ウェイター、ウエイトレス達はもちろんだが、連日阿修羅のごとき形相でサンドイッチを作り、コーヒーをたて、グラスを洗っていたY、K、H、Nらに拍手を送ってその労をねぎらい、雑文を終えることとしたい。

マルガメ セカンド

『環境科学野外調査A』を終えて

自然の総合的考察への入口

私たち総合科学部2年生10数名、院生2名及び先生方5名は、8月6日～9日までの4日間、環境科学野外調査Aで大山及び弓が浜半島へ行った。この調査の目的は、普段机上で学習していることを実際に生の目で見、体験し、よりいっそう理解を深めると共に、自然とじかに触れ合い、それを認識することである。内容としては、植生、地形、気象の3つだが——本来この3つをはっきりと区別するのではなく——総合的に大山の自然を捕えようとするものである。出発前の段階として、上記の3つの分野を分担し、6月から準備し始めた。そしてそれを夏休み前に発表しあい、大山の自然の概要を把握した。

こうして約2ヶ月の準備期間を経て、大山研修をむかえた。宿は、鳥取大学が管理している大山研修センターというところである。この宿舎は、大山の

西側にあたる榎水高原にあった。榎水高原は、大山寺から約3km離れたところに有り、大変静かであった。6日、5時半には、全員センターに到着し、食事、入浴等を済ませ、早速ミーティングを行なった。ミーティングでは、主な日程と翌日の大山登山における調査内容に関するもので、その日は、それだけで翌日に備え、早めに床に着いた。

翌日、7時ごろに起床し、9時に宿舎を出発した。大山の麓まで、植物の名前や性質の説明を受けながら歩き、10時半から大山登山にかかった。登山口から頂上まで、何合目という札のところで休憩をとりながら、係にあたる者が、高度、気温、湿度を測り、また、先生方に植生について説明していただいた。頂上に近づくにつれ、前もって調べていたように、ブナ、ミズナラ等の高木林から、ダイセンミツバツ